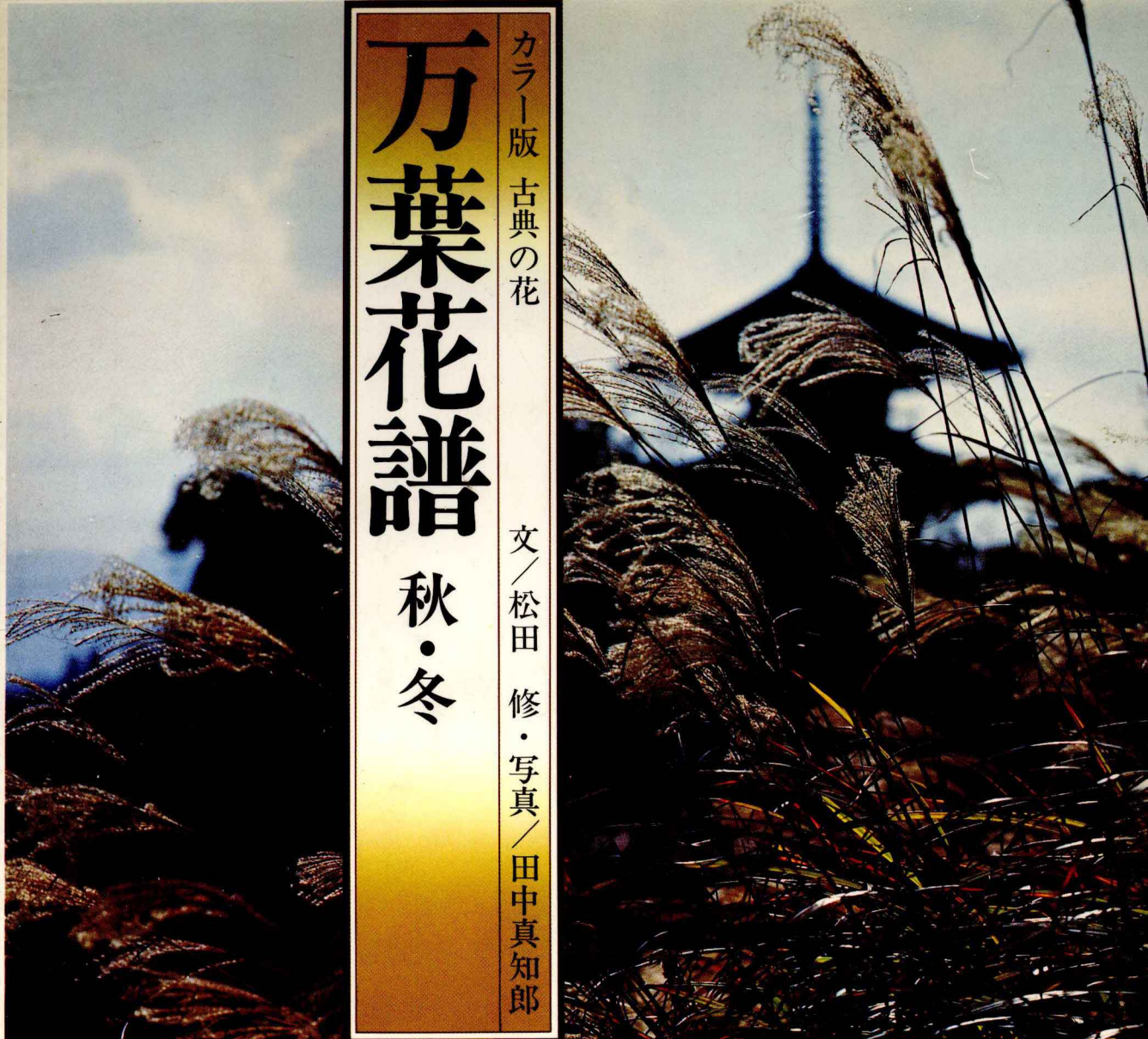
カラー版 古典の花

万葉花譜

秋・冬

文／松田 修・写真／田中真知郎



松田　修（まつだ・おさむ）
一九〇三年、山形県に生れる。東京大学農学部卒業。社団法人「日本植物友の会」会長。専攻は植物文化史。著書に『万葉植物新考』『植物の旅』『植物と伝説』『花と文学』『花ごよみ』『植物世相史』『花の文化史』『古典植物辞典』『秋の百花譜』『冬の草木譜』など多数がある。
現住所／東京都世田谷区砧二-七-一二

田中真知郎（たなか・まちお）
一九二六年、大阪府に生れる。朝日新聞大阪本社出版局写真部員を経て、現在は朝日新聞フォトサービス幹事。
著書に『阿波の木偶』『花の大和路』『歌の大和路』『石仏の大和路』『大和路』『かんのんみち』『大和路かくれ寺かくれ仏』などがある。
現住所／奈良市学園町南一―一一―九

カラー版 古典の花
万葉花譜 秋・冬

昭和五十七年四月三十日発行

著者　松田　修
　　田中真知郎
発行人　石原明太郎
発行所　㈱国際情報
発売元　㈲光書房
〒150 東京都渋谷区東一六一四六
電話〇三（四〇七）六一四六
振替　東京五―三六五四八
印刷所　㈱国光印刷
定価　一六〇〇円
©OSAMU MATSUDA
MACHIO TANAKA
1982
printed in Japan

取替いたします。

カラー版　古典の花

万葉花譜

秋・冬

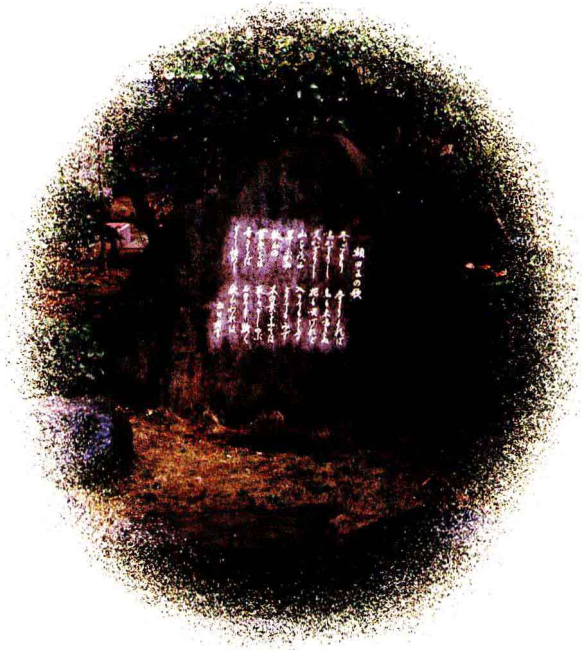
文・松田　修
写真・田中真知郎

国際情報社

カラー版 古典の花

万葉花譜 秋・冬

――目次――



著者の書になる額田王歌碑（三島市楽寿園）

秋

はぎ 7
すすき 10
くず 12
なでしこ 14
をみなへし 17
ふぢばかま 18
あさがほ 21
ひえ 37
きみ 38
あは 39
いね 40
うも 42
やまあゐ 45
うけら 46
かつら 63
くり 64
はり 66
ひさぎ 69
つき 71
まゆみ 73
え 75

たで 22
さはあらぎ 23
いちし 25
おもひぐさ 28
むぐら 30
からあゐ 33
あし 34
をぎ 36
たまばはき 48
はじ 51
もみぢ 53
かへるで 56
こなら 58
つるばみ 59
かしは 60
かづのき 61
ちち 76
こも 78
にこぐさ 78
ごどう 79
にれ 80
さねかづら 82
あづさ 84

冬

まつ 87
すぎ 90
ひ 92
おみのき 93
つがのき 94
さかき 95
かへ 96
いちひ 97
かし 98
むろのき 99
しらかし 100
しひ 101
つまま 102
ゆづるは 103
つげ 105
たけ 107
しの 109
ささ 111
すず 111
ひかげ 112
ほよ 113
みつながしは 114
あふひ 115
やまたちばな 116
やますげ 117
こけ 118
万葉植物雑 120
索引 140

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

はじめに

『万葉花譜』は、『万葉集』に現れた花の面影をたどりながら、万葉人はこれらの花をどう観察し、またこれらの花は万葉人の生活や文化、民俗、恋などとどう結ばれているかを、例歌をあげて解説し、見て楽しく、読んで楽しい万葉の花を再現してみようという試みである。

万葉人が愛好し、かつ喜んで観賞した花は、山野の花を中心としており、全体として草花よりは木性の花が多いのであるが、『万葉花譜』では、万葉人の花に対する態度を伝えるために、『万葉集』に登場する花を四季に分けて紹介することにした。すなわち、春と夏の花を扱ったのが、既刊の『万葉花譜 春・夏』であり、秋と冬の花を扱ったのが、この『万葉花譜 秋・冬』である。そして、お読みいただければわかるように、『万葉花譜 秋・冬』の巻末には「雑」という花のグループを集めている。ここでは、四季それぞれの花を一緒に扱っているが、これらはいずれも、万葉植物中でも難解といわれるものであり、現在名が未詳の植物もいくつかある。

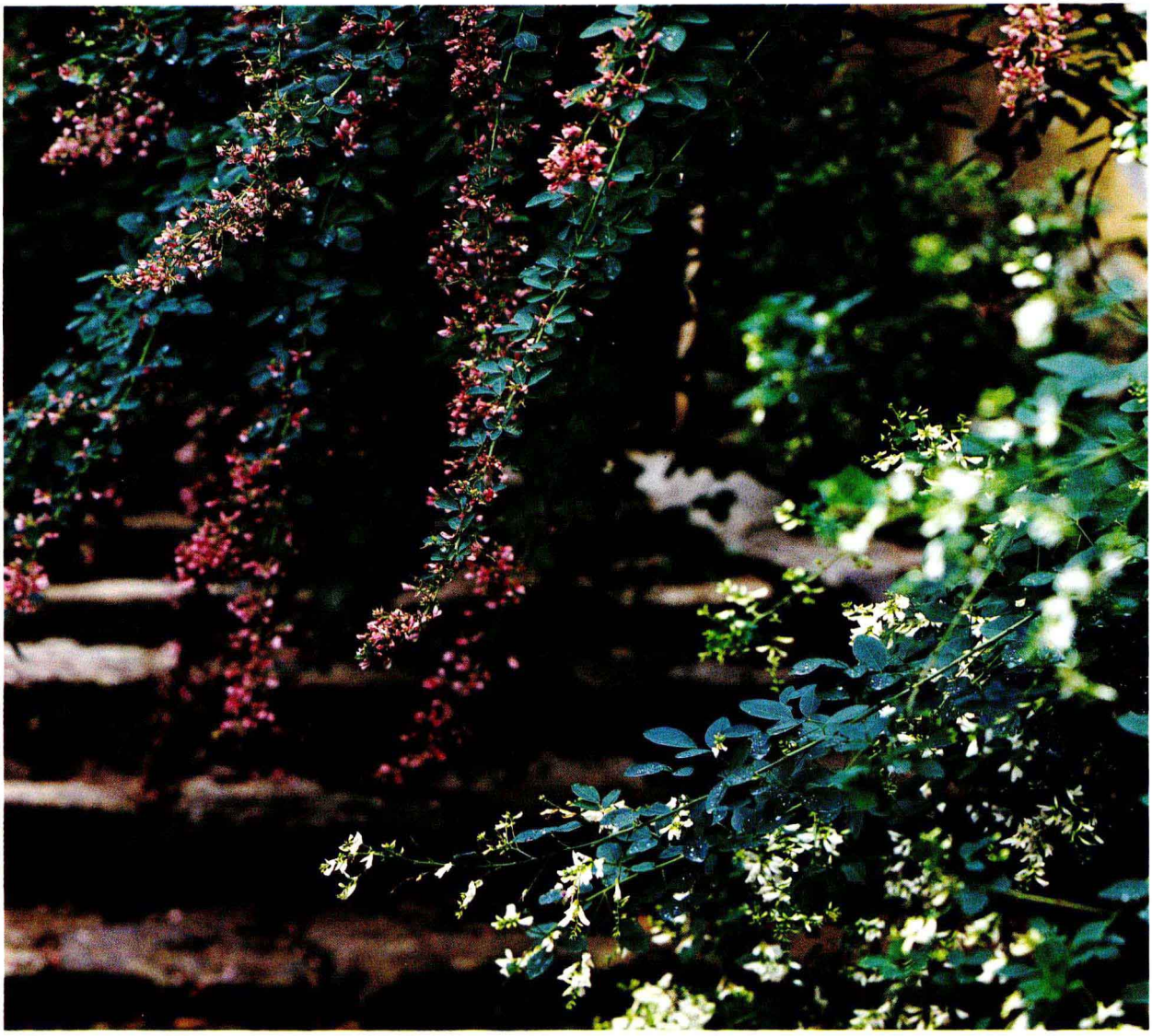
『万葉花譜』二冊を併読いただければ、『万葉集』に登場する花や草木は、すべてわかるようにしたつもりである。つまり、『万葉花譜』は〝万葉植物図鑑〟を兼ねるわけであり、『万葉集』を読む人、また、古典文学に出てくる花に興味や関心を持つ人の参考になればと考えている次第、ご利用いただければ幸いである。

私は生涯をかけた万葉の花の解釈を担当し、大和の歴史的風土を背景に、楽しくも美しい花の写真を撮ってくださったのは、奈良市在住の写真家、田中真知郎氏である。なお、引用した例歌とその解釈は、岩波版の日本古典文学大系『万葉集』全四巻を底本とした。高木市之助、五味智英、大野晋氏という当代一流の万葉学者、国語学者の校注によるものだからである。

昭和五十七年四月　松田　修

秋

をみなへし



はぎ

芽・芽子・波義・波疑

ハギ（まめ科）

秋は八千草の花咲く時である。『万葉集』にはこの秋草を詠んでいる歌が多い。その中でも数多く詠まれているのはハギで、集中百四十一首、草木類では第一位を占めている。

山上憶良は、「秋の野の花を詠む二首」で、

秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花　　其の一（巻八―一五三七）

萩の花尾花葛花瞿麦の花女郎花また藤袴朝貌の花　　其の二（巻八―一五三八）

と詠み、秋草の中でもこのハギを冠頭に数えている。『万葉集』では、このハギを表すのに芽、芽子、波疑、波義の字を用い、

春日野に咲きたる芽子は片枝は未だふふめり言な絶えそね　　（巻七―一三六三）

百済野の芽の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも　　山部赤人（巻八―一四三一）

秋の野をにほはす波疑は咲けれども見るしるしなし旅にしあれば（巻一五―三六七七）

朝霧のたなびく田居に鳴く雁を留み得むかも吾が屋戸の波義

藤原皇后（巻一九―四二二四）

といった用法である。波疑・波義は音字であるから問題はないが、芽、芽子の字をハギに用いたのは、ハギは春になると古枝から芽を出すからで、ハギの名も生え芽という意味で、古い株から芽を出すのでこの名がついたといわれている。今は俗に萩の字が慣用されているが、これは秋草の代表として草冠に秋と書いてハギとよませたもので、この用字はすでに奈良朝時代にできた『出雲国風土記』や『播磨国風土記』にも出ているから、この用法は天平時代にはじまるといってよい。ただし萩は国字で中国の萩とは関係なく、漢名は一般に胡枝花をあてている。

以上は万葉用字の吟味であるが、万葉人がいかにこのハギを愛していたか、それは、

秋萩に恋ひ尽さじと思へどもしるや惜しまたも会はめやも　　（巻一〇―二一二〇）

わが待ちし秋は来りぬ然れども萩の花ぞもいまだ咲かずける　　（巻一〇―二一二三）

見まく欲りわが待ち恋ひし秋萩は枝もしみみに花咲きにけり　　（巻一〇―二一二四）

といった一連の歌でもわかる。第一首は、秋ハギなどに恋心を傾け尽したりはすまいと思うけれども、ええままよやはり惜しいことだ。この花の盛りにまた会えやしないのだといった意。第二首は、私が待っていた秋はやって来た。だがしかしハギの花はまだ咲かないことよ。第三首は、見たいと思って私が待ち焦れていた秋ハギは枝いっぱいに咲いたこ

とよとその喜びを表している歌である。そしてその花が咲くと、

秋風は冷しくなりぬ馬並めていざ野に行かな萩が花見に　（巻一〇―二一〇三）

と馬を並べてハギの花見に出かけるという貴公子連中もいたらしい。また、万葉のハギの歌に配されたものは鹿と雁であった。

さ男鹿の妻ととのふと鳴く声の至らぬ極みなびけ萩原　（巻一〇―二一四二）

雄鹿が妻を呼び寄せようと鳴く声がとどくであろう果てまで靡けよハギ原よ、という歌で、広いハギ原が目に浮んでくる。万葉以後ハギには鹿がよく配されているが、鹿は秋になると生殖期に入るのである。

君に恋ひうらぶれ居れば敷の野の秋萩凌ぎさ雄鹿鳴くも　（巻一〇―二一四三）

この歌も鹿を配した歌で、あの方に恋い焦れてしょんぼりしていると、敷の野の秋ハギをおし分けて雄鹿が鳴くことよと歌っている。ハギ咲く頃の鹿も秋の風物詩なら雁もまた、

雁来れば萩は散りぬとさ雄鹿の鳴くなる声もうらぶれにけり　（巻一〇―二一四四）

天雲に雁ぞ鳴くなる高円の萩の下葉はもみちあへむかも　中臣清麻呂（巻二〇―四二九六）

という雁の声も万葉人には秋を知らせる声であった。こうして秋は静かに更け、盛りをみせた秋ハギもやがて下葉が色づく。

秋風の日にけに吹けば露しげみ萩の下葉は色づきにけり　（巻一〇―二二〇四）

この頃の暁露に吾が宿の秋の萩原色づきにけり　（巻一〇―二二一三）

第一首は、秋風が日増しに吹くと露がひどいのでハギの下葉は色づいてきたことよとの意。第二首は、この頃の夜明けの露のためにわが家の庭先の秋のハギ原は色づいてきたことよ、とその色づきに目を驚かせている歌である。万葉人はこのようにハギを色々の面から観察し賞玩しているのであるが、またこの花を以て着物を摺り染めにした歌もみえる。

吾が衣摺れるにはあらず高松の野辺行きしかば萩の摺れるぞ　（巻一〇―二一〇一）

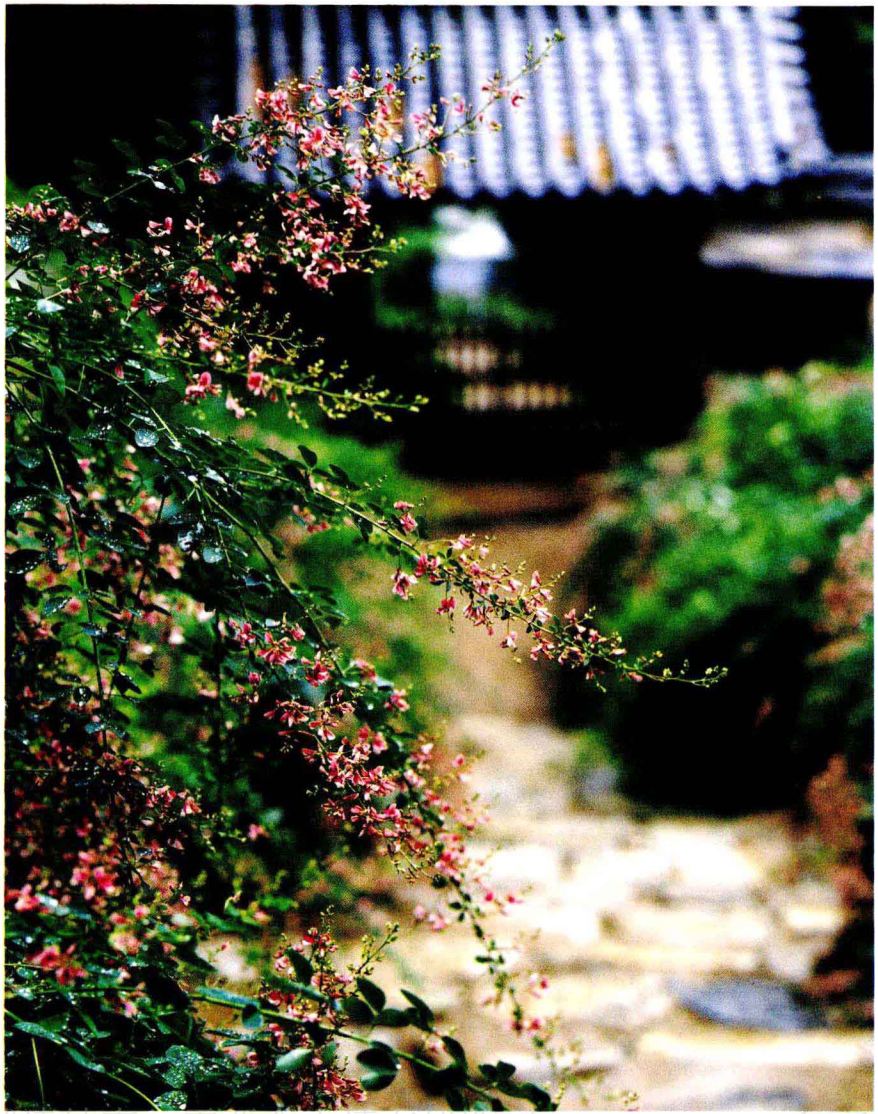
殊更に衣は摺らじ女郎花咲く野の萩ににほひて居らむ　（巻一〇―二一〇七）

という歌がそれである。しかしこれは花摺り衣で実用的なものではなかったと思われる。万葉のハギの歌にはまたこの花の散るのを惜しんでいる歌も多い。

秋さらば妹に見せむと植ゑし萩露霜負ひて散りにけるかも　（巻一〇―二一二七）

このごろの秋風寒し萩が花散らす白露おきにけらしも　（巻一〇―二一七五）

さ夜ふけて時雨な降りそ秋萩の本葉の黄葉散らまく惜しも　（巻一〇―二二一五）



という歌がそれでその愛花のほども知られるばかりでなく、この花が『万葉集』の全巻にわたって現れているのも注目される。ことに巻八、巻十に集中的に収められているのは、時代的にいえばこの花の愛好は、飛鳥、藤原京時代は少なく、奈良朝時代に入ってからで、これは奈良の都をとりまく春日野や高円の辺りにはこのハギが多く生えていたからでもあろう。最後にこのハギであるが、日本にはこのハギの種類が多く、ヤマハギ、ミヤギノハギ、キハギ、ミヤマハギ、シラハギなどというのがある。しかし『万葉集』にハギと詠んでいるのはヤマハギで、これは花の観賞もさることながら、昔はこれが屋根の材料になったり、古枝は垣根、実は食料にするなど万葉人の生活と深く結ばれていたためである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

すすき　須々伎・須々吉・為酢寸

ススキ（いね科）

秋の花でハギに次ぐものとして万葉人に愛されたのはススキであった。『万葉集』にはススキの歌十七首、ヲバナとあるもの十九首、カヤと詠まれているものが十首ある。ススキ、ヲバナ、カヤは同一物を指しているものであるから、ススキの歌は計四十六首になる。

ススキはこのように三通りの名で万葉に現れているが、その語源について『牧野・新植物図鑑』に「ススキはすくすくと立つ木（草）の意ともいわれ、また神楽に用いる鳴物用の木すなわちスズの木の意ともいわれる。また尾花（オバナ）は花穂を指しての名で、カヤは刈屋根の意で刈って屋根をふく意であろう」と説明されている。

これらの呼名のほかに万葉の歌には、ハタススキ、シノススキ、ハナススキなどの名も見えるが、ハタススキはススキの穂を旗をささげた形に見立てた名、シノススキは細竹ススキでなよやかな細いススキの意、ハナススキは花ススキで、これは花穂のことである。

人皆は萩を秋といふよし我は尾花が末を秋とは言はむ　（巻一〇―二一一〇）

という歌があるから、ヲバナはハギにも匹敵すべき人気者であったことがわかるし、

秋の野の尾花が末に鳴く百舌鳥の声聞くらむか片待つ吾妹　（巻一〇―二一六七）

夕立の雨降るごとに春日野の尾花が上の白露おもほゆ　（巻一〇―二一六九）

と百舌鳥や白露を配し、優雅に秋の情景を歌っている。野のススキばかりではない。ススキは庭にも移し植えて、

わがやどの尾花おし靡べ置く露に手触れ吾妹子散らまくも見む　（巻一〇―二一七二）

帰り来て見むと思ひしわが宿の秋萩すすき散りにけむかも

秦田麻呂（巻一五―三六八一）

など、それを楽しんでいた。

ススキは漢名、「芒」。しかし普通は「薄」の字を慣用している。これはこの茎葉が密に叢をなして株から生えているのを見立てた名で、上代人がつくった和字で漢名ではない。

秋の風物として文学に多く現れているが、古歌に頻浪草、袖振草、次波草、乱れ草などとあるのも、みなこのススキの異名である。

くず　田葛・久受・葛

クズ（まめ科）

クズは集中に十八首詠まれているが、花を詠じたものは山上憶良の秋の野の七種の花の一つに数えられただけで、多くはクズのたくましくのびるその性質をとらえて、枕詞や比喩としているものが多い。その豪快な姿を詠んでいるのは、

真葛原なびく秋風吹くごとに阿太の大野の萩の花散る　（巻一〇―二〇九六）

という一首で、クズの葉が秋風にひるがえって真っ白な葉裏を見せている、広い野原の躍動的な光景が目に浮かぶ。

真田葛延ふ夏野のしげくかく恋ひばまことわが命常ならめやも　（巻一〇―一九八五）

赤駒のい行きはばかる真葛原何の伝言直にし良けむ　（巻一二―三〇六九）

大崎の荒磯の渡延ふ葛の行方もなくや恋ひ渡りなむ　（巻一二―三〇七二）

という一連の歌はクズを枕詞や比喩に用いた例で、第一首は、クズが這いひろがる夏の野が茂っているように、このように恋いこがれていたら、ほんとうに私の命はいつまでもあるであろうかといった意。第二首は、赤駒が進みかねるクズの原ではないのに、どうして人に伝言などするのか、じかに会っていえばよかろうにといった意。第三首は、大崎の荒磯の渡し場にのびるクズのように行方もなく恋しつづけていくことであろうかと、クズに思いを寄せている歌である。またこのクズの紅葉も美しい。

雁がねの寒く鳴きしゆ水茎の丘の葛葉は色づきにけり　（巻一〇―二二〇八）

わが屋戸の田葛葉日にけに色づきぬ来まさぬ君は何心ぞも　（巻一〇―二二九五）

は、それを詠んだものである。またクズは根から殿粉をとってクズ粉として食用・薬用に供し、昔はこのクズの繊維を衣服の原料にもした。

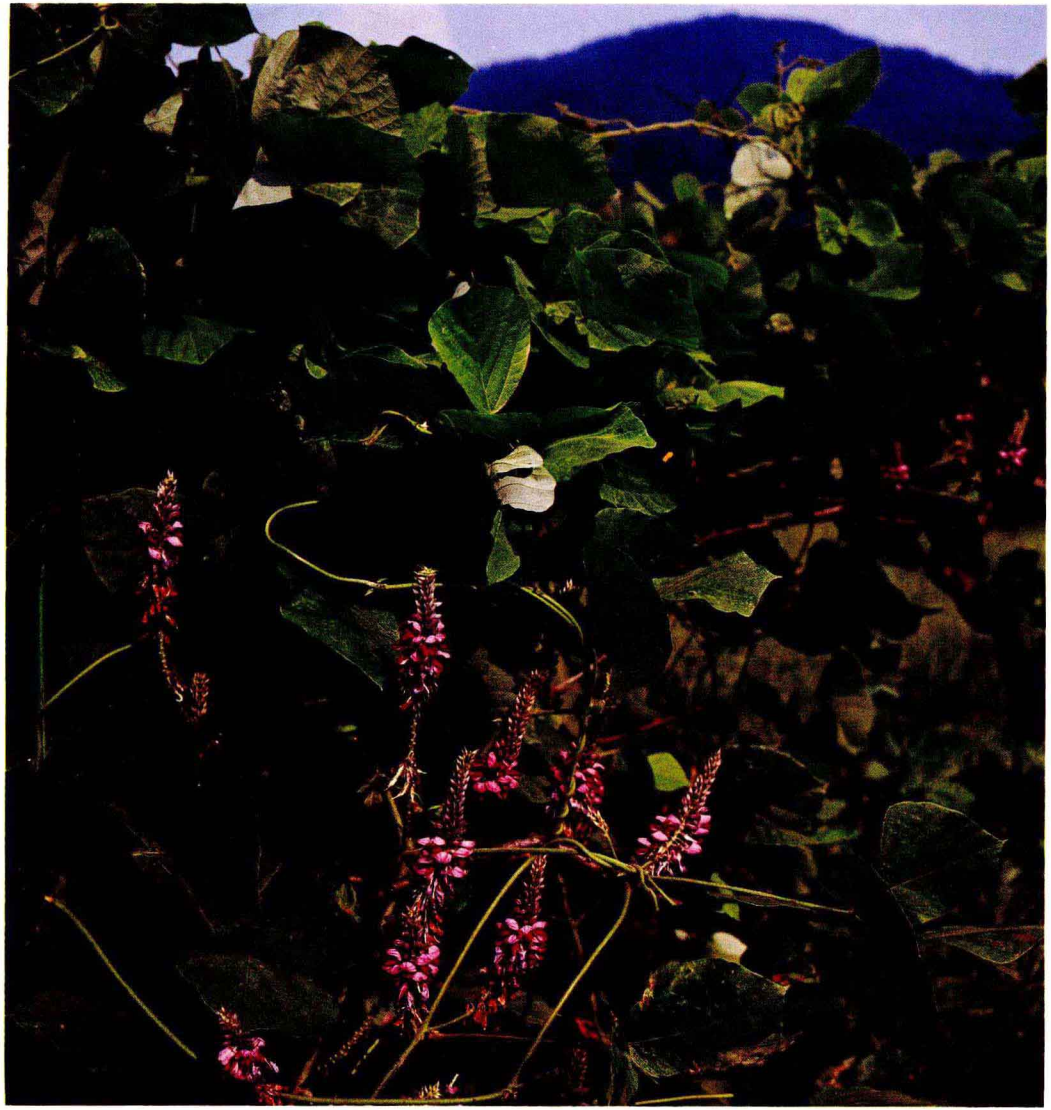
剱太刀鞘ゆ入野に葛引く我妹真袖もち著せてむとかも夏草刈るも　（巻七―一二七二）

ほととぎす鳴く声聞くや卯の花の咲き散る丘に田葛引くをとめ　（巻一〇―一九四二）

この二首はクズの繊維を衣料にしたことを示し、この繊維をとるために「田葛引く」の語があり、また「夏葛」の語も生れる。クズは夏に生育がよく、繊維も強いからである。

歌の中に「真葛」とあるのは美称で、「田葛」の用字は、荒れた田などにも生えているところから田の字を冠したものかどうか、これについての注釈は見当らない。

クズは広くわが国の山野に自生している宿根性の草本で、クズの名は一説に大和の国栖の地から出て、昔、国栖の人々がクズ粉を売りに歩きまわったので、自然とクズの名がつ



いたともいわれる。クズは大和の吉野川筋に多く、吉野山へ行くと今でも名産のクズ粉を売っている。わが国の山野に自生する宿根性の草本で茎は長大、葉は大形で葉裏が白い。秋に葉腋から総状花序を出して淡紅色の香気ある蝶形花をつける。根は肥大して内部は白色、これからクズ粉をつくり、クズの根を干したものを葛根と称し、発汗・解熱薬とする。

なでしこ

瞿麦・牛麦・石竹・奈泥之故
奈豆之故・那泥之古

ナデシコ、一名カワラナデシコ（なでしこ科）

秋の七種の花の第四にあげられる花がナデシコで、集中、これを詠んだ歌が二十六首みえる。ナデシコの名は『大和本草』に、「撫子とは花の形ちひさかにて、其愛すべきを以て名く」とあるように、その花の可憐な様子に基づいた名で、万葉の歌もまた、この花の姿を愛している態度のものが多い。

なでしこが花見るごとにをとめ等が笑まひの匂ひ思ほゆるかも

大伴家持（巻二〇―四一一四）

歌は、家持がナデシコを植えて都に残してきた愛妻を偲んでいるものである。この花は上代人の嗜好に適ったものか、庭中に植えて観賞したとみえて、

わが屋前に咲けるなでしこ幣はせむゆめ花散るないやをちに咲け

丹比国人真人（巻二〇―四四四六）

歌は、わが家の庭先に咲いているナデシコよ、贈り物をしようから、決して花を散らさぬよう、ますます新たに咲いてくれよといった意。ナデシコを庭に植えて観賞したばかりでなく、これを造花にして雪中に遊んだとみえて、

なでしこは秋咲くものを君が家の雪の巌に咲けりけるかも　久米広縄（巻一九―四二三二）

雪の島巌に植ゑたるなでしこは千世に咲かぬか君がかざしに

蒲生娘子（巻一九―四二三二）

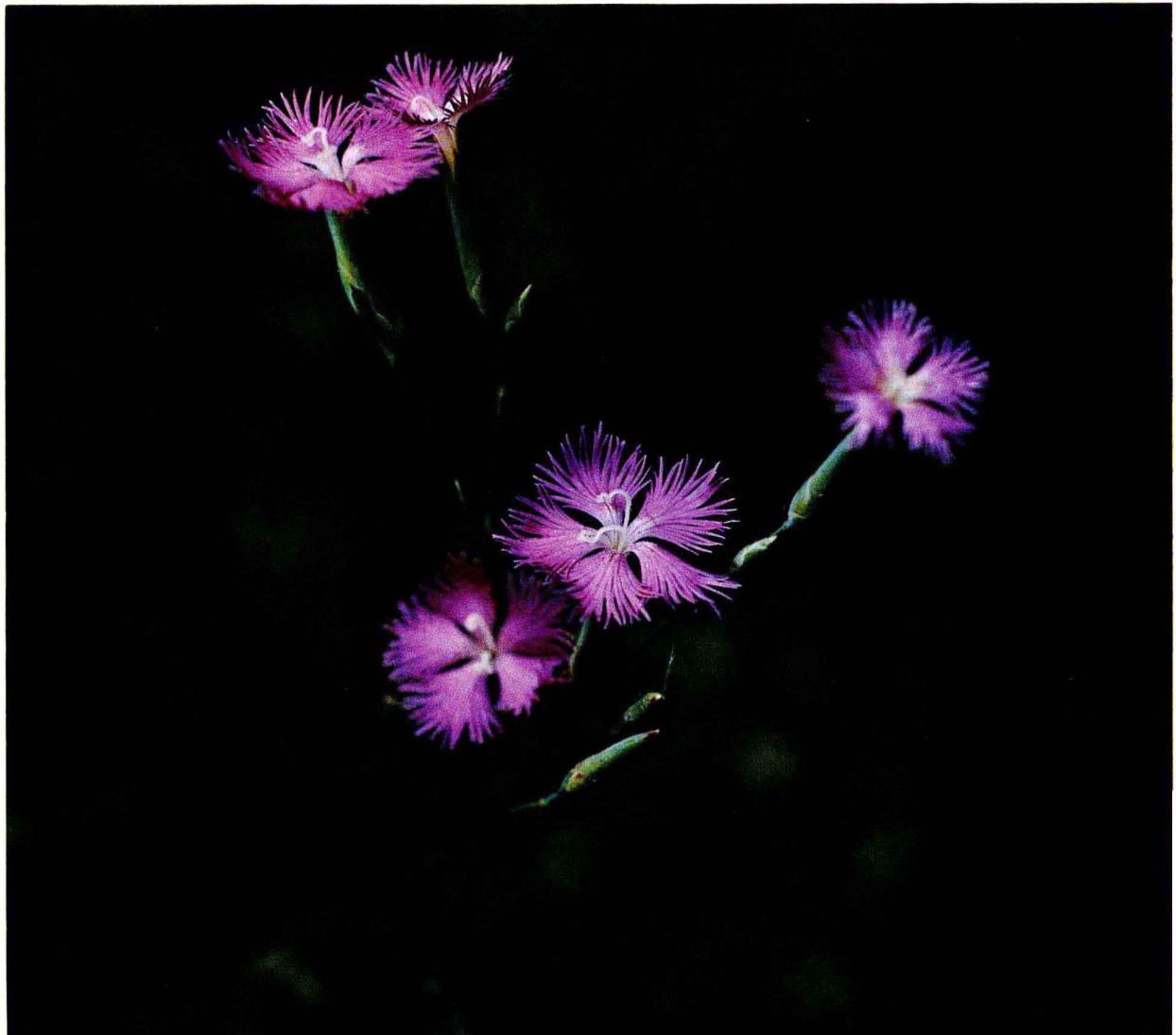
などというのがそれで、これは宴席の風雅な遊びの趣向であったのかもしれない。

『万葉集』ではナデシコに瞿麦、牛麦、石竹などの字を用いているが、これは中国の『唐本草』によったものであろう。しかし、石竹はカラナデシコにあてられる字で、日本のナデシコには適用しないものであるが、当時はその区別もなかったのであろう。

ナデシコは各地の山野に広く自生している多年草で、茎は数本叢生し、隆起した節があり、高さは普通五〇センチ、まれには一メートルにもなるものもある。葉は対生して線形あるいは線状皮針形、色は緑色ないし粉緑色。夏から秋にかけて、花弁五裂した優美で雅味のある淡紅色の花を開く。

野辺見ればなでしこの花咲きにけり吾が待つ秋は近づくらしも　（巻一〇―一九七二）

と万葉人が歌っているように、秋野に早く咲き出でて、夏から秋への季節の移ろいを知らせてくれるナデシコの花は、いつ見ても可憐さを感じさせる。



15

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com